「バイリンガルな日本語文学」の将来性

郭　南燕

バイリンガルといえば、二つ（以上）の言語を完璧に使えることを意味する言葉だろうと思ってきたが、問違いだった。

バイリンガルに関する研究書をひもといたら、二つの言語を話す、聞く、読む、書くという四技能を完璧に持つ人は非常に少数だ。むしろ四技能をうまく使い分けることができるかどうかが、バイリンガルを決める標準だと見なされている。その基準に従えば、世界の半分以上の人口は、方言を含めて二つの言語を使えるバイリンガルだと推定されている。日本でも多くの人々はバイリンガルだろう。

それなら、私なんかもバイリンガルの行列に入れそうだ。頭の中ではいくつかの言葉がいつも混在している。第一言語となる二つの方言（北京語、上海語）、第二言語の日本語、第三言語の英語。しかし、習得した言葉の数は誇るに値するものは何もない。むしろそれらの言葉を使って世界とどのように関わっているかを考えることが大切だと思う。過去数年、私がもっとも関心をもっているのは、外国人が日本語を使って文学創作をすることは何を意味しているのかを模索することだ。

日本語は、現在世界の一七二の使用言語の中で、九番目の使用人数（日本の人口数に相当）をもっている。日本語は和語、漢語、欧語の交雑によって構成された〈雑種的〉な言語だとい

えよう。外国人で日本語の新聞雑誌、文学書を理解できる人は約二百万人いるだろうと推測できる。日本語の四技能を完璧に近いレベルで持つ外国人も少なくない。近年、外国人が日本語を使って文学を創作し、多くの文学賞を受賞していることが注目されている。たとえば、

リービ英雄：野間文芸新人賞（一九九二年）、大佛次郎賞（二〇〇五年）、伊藤整文学賞（〇九年）

アレックス・カー：新潮学芸賞（一九九四年）

デビッド・ゾペティ：すばる文学賞（一九九六年）、日本エッセイスト・クラブ賞（二〇〇二年）

アーサー・ビナード：中原中也賞（二〇〇一年）、講談社エッセイ賞（〇五年）、日本絵本賞（〇七年）、山本健吉文学賞（〇八年）、講談社出版文化賞絵本賞（一三年）、産経児童出版文化賞（一三年）

田原：留学生文学賞（旧ボヤン賞：二〇〇一年）、H氏賞（一〇年）

シリン・ネザマフィ：留学生文学賞（二〇〇六年）、文学界新人賞（〇九年）

楊逸：文学界新人賞（二〇〇七年）、芥川賞（〇八年）

このリストをみれば、これらの作家が日本の文化に与えた貢献が大きいことが分かる。これは研究する価値のある現象だと思った。同僚鈴木貞美さんと稲賀繁美さんにアドバイスをいただきながら、シンポジウム「日本語で書く：文学創作の喜びと苦しみ」（二〇一〇年一月）と「日本語で書く：非母語文学の成立」（一二年一月）を開催した。研究者が発表すると同時に、七人の作家を招待して、創作観を披露していただいた。

田原氏（中国）は、日本語の不自由さに縛られながら羽ばたこうとする創作の苦しみと喜び

を語った。シリン・ネザマフィ氏（イラン）は、言葉の違いがあっても、想像の世界を駆け巡る自由度は同じだと強調している。ボヤンヒシグ氏（中国・内モンゴル）は、数少ない日本語の語彙を重宝しながら、詩情を展開させる経験を教えてくれた。楊天曦氏（中国）は、日本文学の伝統に馴染みながら、新しい要素を持ちこもうとしている。リービ英雄氏（米国）は、音声に対する鋭敏な感受性と言語権に対する主張を合わせ持っている。アーサー・ビナード氏（米国）は、物事の真実をつき、駄洒落の力で日本語の魅力を引き出す話が印象的だ。温又柔氏（台湾）は、台湾語と日本語に育まれた感性を生かす創作が新鮮なものばかりだ。

これらの発言を聞いているうちに、彼らの文学を「バイリンガル」という言葉で要約できると思った。私の提起した「バインリンガルな日本語文学」という概念は、書き手は「日本人」ではなくてもよいこと、日本語は母語ではなくてもよいこと、日本語で書くことには言語的、芸術的、社会的、経済的、政治的な選択があったこと、外からの視点で日本語と日本文化を観察し解釈していること、独自な日本語の運用法があること、多言語・多文化の影響が投影されていること、また日本の植民地統治によって祖先の言葉を奪われた苦渋があらわれていることなどを意味している。

シンポジウムで聞いた作家たちの発言と研究者たちの論文を集めて、『バイリンガルな日本語文学：多言語多文化のあいだ』という論文集を作ることにした。同僚磯前順一さん、稲賀繁美さん、白石恵理さんに助けられ、所長裁量経費の助成をいただいて、二〇一三年六月に三元社から出版することができた。作家六人の創作談と研究者十八人の論文とコラムが一堂にあつまる盛観を呈する本となった。

内容は四部に分けている。「第一部　外国人の日本語文学」「第二部　作家たちの発言」「第

三部　植民地遺産から生まれた日本語文学」「第四部　母語と非母語を超える」だ。取り上げられた文学は、創作の時代は二十世紀十年代から二十一世紀十年代まで跨がり、作品の舞台は日本、朝鮮半島、台湾、香港、中国、イラン、インド、アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、ヨーロッパ諸国、と世界的規模をもつ。作品の形式は小説、随筆、詩、和歌、俳句、演劇などがあり、内容は、文学、言語、歴史、社会、法律、思想、映像、音響、ジェンダー、環境、経済、戦争などの角度から分析されなければならないほど豊富なものだ。

これらの作家たちは、日本人を主な読者として想定して日本語で書いたことは大きな意味がある。つまり、日本語で身体感覚と心理活動を繊細に折り込み、読者の心を打ち、美意識に訴え、共感を呼ぶように工夫しなければならない。使い慣れていない言葉による創作は決して簡単ではない。ボヤンヒシグ、田原、楊逸、シリン・ネザマフィの諸作家はこのような困難に言及している。にもかかわらず、作家たちは、母語の影響の濃い日本語をもって、日本語話者の描写できない世界を作りだしている。また、作中の主人公たちの母語と母語文化がいかに日本語と日本文化と拮抗したり、溶けあったりしているかに関する描写が、彼らの文学の一部となっている。

日本語文学を鑑賞する楽しみの一つは、日本語と日本文化に持込まれた新しい要素を見つけることだ。見慣れていない、聞き慣れていない表現は従来の表現よりも、物事の新しい側面を瞬間的に見せてくれることが多い。言語の発展においては、新しい表現はだいたい驚き、首肯き、共有、継承という段階を経ていると思われる。また、作家たちの行う文化比較によって、当たり前と思ってきた日本の文化的現象は、外からみれば、不思議なものだと教えられてハッとして、日本文化を新しく認識するようになることが多々ある。

たとえば、ビナードは、高速道路に近いマンションに住んでいる自分は、「体内にためている音のかなりの部分が騒音」だと表現している。溜まるはずのない音波に関する非常に適切で目を奪うような表現だ。騒音が人間に与えた影響の深刻さをすぐ想像させ、読者の共鳴を呼ぶ。

また、ボヤンヒシグは、「日本のどこへ行っても、時計がよく見られる」が、モンゴル語は「時間」「時計」「時代」「季節」を「チャグ」のひとことで大雑把に表しているため、「モンゴル人の顔からは永遠は見られるが、瞬間はほとんど見られない。日本人の顔からは瞬間がキラキラと目につく」と表現している。この書き方は、多くの日本人が時間に几帳面で、性格がせっかちだという特徴を示してくれる。このような示し方が正しいかどうかは問題ではない。重要なのはその表現が美しく、読者の意表をつき、日本人の性格の一側面を目立たせてくれることだ。

バイリンガルな人々の日本語で創作した文学作品を通して、日本語と日本文化を考え直すことが日本人に要求される時代に来ていると思う。バイリンガル性は、言語と文化を豊かにする可能性をも意味している。

「バイリンガルな日本語文学」はこれからどこへ向かうだろう。書き手が外国人かどうか、使用言語は母語かどうか、ということを基準にするのではなく、むしろ作品には言語的、文化的多義性があるかどうかを検討することこそが究極の目的だと思う。そうすると、日本人作家の作品もこのカテゴリーの中に入れられるものが多いだろうと思われる。言語的、文化的多義性をもつ作品を作っているなら、「バイリンガルな作家」と呼ばれてよいだろうと思う。

（国際日本文化研究センター准教授）